

## 制約の少ない幼稚園に注目

数年前、わたしは求められて、使用漢字についての石井案を文部者に提出しました。わたしは、一年生に最も多く提出すべきだと思っていますが、それはすぐには容れられるはずがないと思い、120字を選んで提出しました。

その後、「今までの46字の2倍、90字くらいに落ち着きそうだ。ここまでいけば大成功ですよ」と、文部省の先生が教えてくれましたが、結局は、一年生が76字になってしまいました。これは、現状を変えることを喜ばない現場代表の先生の意向を反映した結果なのです。

決定してしまったあとですが、その先生が「これで成功すれば、次の改定の時には、150字にもっていくこともできる。そして、それに成功すれば、その次には、300字にできる……」と言われました。

歯がゆいけれども、これはもっともな意見にちがいません。文部省としては、いかに教育効果を目指すとは言え、簡単に変えることは許されません。くるくる方針を変えてばかりいたら、大変です。そう思ってわたしも、あせらないことにしました。

とは言っても、手をつかねていたのでは、事態は動きません。全力を尽して引っ張っても、ゆるゆるとしか傾かないのですから、力を出し惜しんでいたら、世の中は少しも動きません。

そこで「学校教育よりもそれ以前の幼稚園教育を考えよう。これを前

進させれば、自然小学校も前進しないわけにはいかない。幸い、幼稚園教育は、小学校教育ほどの制約を受けていない……」と考えました。

こういうわけで、今、幼稚園の石井方式漢字教育が始まったのですが、この新しい作戦を考案し、計画し、実践して下さったのが、大阪市の小路幼稚園の井上文克園長です。

井上先生がわたしの著書を読まれたのは、昭和42年の12月末のことです。読み終わってすぐ、取る物も取りあえずという形で上京し、わたしの家を訪ねてくれたのです。その時先生は、「石井方式の普及、日本の教育の改革は、まず幼稚園から手をつけるべきではないか。幼稚園は、それには最も適した場である。わたしにお任せ下さい」とおっしゃったのです。

その後、大阪で準備された会にたびたび出席して、多くの園長先生方に石井方式漢字教育の実践について話したり、奨めたりすることになりました。

「幼児が漢字を覚える？ほんとだろうか。ほんとだとしても、それは一部の幼児に過ぎないのではないか」　そういう考えの園長が多かったと思います。しかし、わたしと井上先生の熱意が通ってか、実践に踏み切る幼稚園がどんどんふえていき、たちまち、数十の幼稚園がこの教育を力強く推し進めてくれるようになったのです。